

朝日遺跡出土の金属器鑄造関連遺物について

石黒 立人・野口 哲也*

(1)1979年度出土の土製品 A

はじめに

1972年～1979年にかけて愛知県教育委員会によって行われた朝日遺跡の調査において、銅鐸の飾り耳および銅鐸形土製品など銅鐸に関連する遺物が何点か出土している。詳細についてはすでに報告済みであるため、ここではこれらについては触れず、1979年度の調査中に出土し、未報告のままであった土製品について紹介する。

出土状況

この土製品の詳細な出土状況の記録は残されていないようであり、ただ「……北居住域内にあたるⅣ3 H25の包含層（土坑であったと思われる）出土の二次的焼成または高温度の熱を受けたやや赤味を帯びた粘土塊がそれである。この粘土塊が出土した位置は、小銅片の北西約45m、銅鐸耳飾の北約15mにあたり、三者は相近接し北居住域内におさまってしまう。…」という記述があるのみである⁽¹⁾

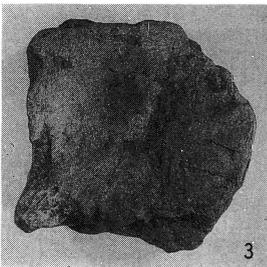
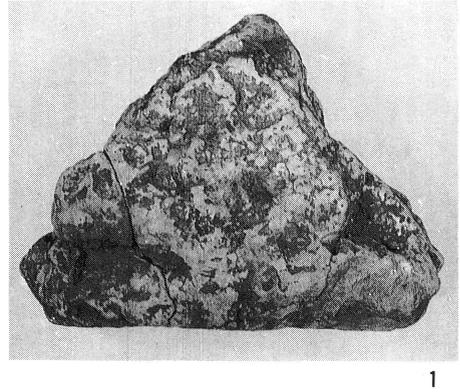
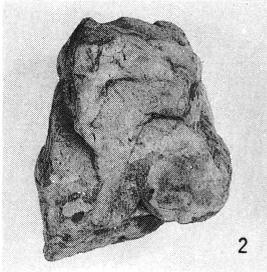
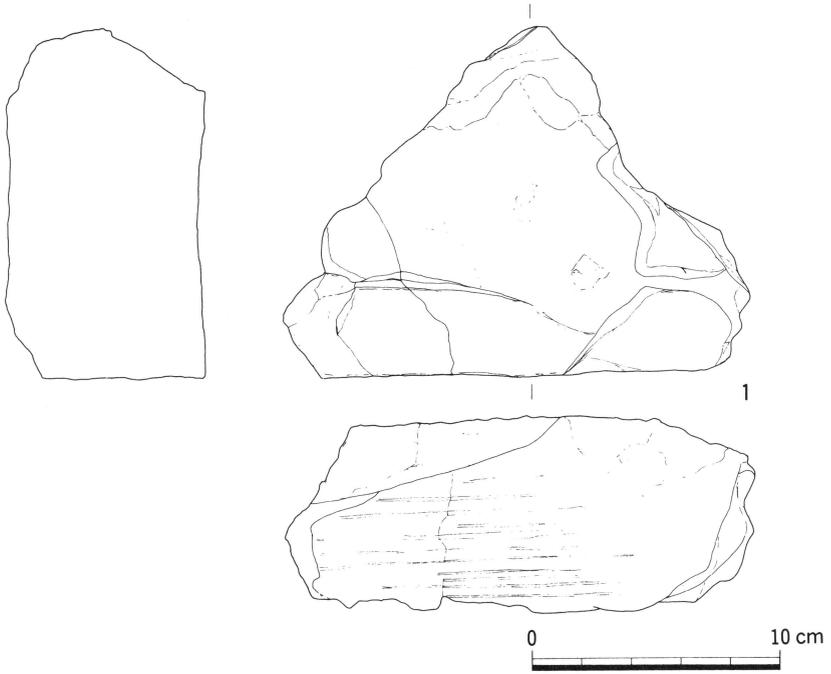
観察

資料は比較的大きな塊と小さな塊があり、胎土などからすべて同一のものであると考えられる。このうち比較的大きなもの3点について観察を行う。1は資料中最も大きな塊である。現状では長さ18.6cm、幅14.1cm、厚さ8.0cm、断面はほぼ長方形である。上下面ともほぼ平坦である。外側に当たると考えられる部分も平坦であり、板の小口状の工具でつけたような数条の調整痕と考えられる横位の線条痕がみられる。また、上面左端に長さ9.9cm、幅3.5cmの斜めの面がみられる。上半部は二次的焼成または高温度の熱を受けたようで赤味を帯び、下半部は灰色である。胎土は通常の土器のような礫粒などを含まず、非常に細かく均一な砂粒である。銅鐸などの文様を掘り込んだ面などは見られない。2・3は胎土は1と同様であり、不定形である。2は1と同様上半部は二次的焼成または高温度の熱を受けたようで赤味を帯び、下半部は灰色である。上面に二段の段がみられる。3は比熱を受けた部分があまりみられない。上面に一段の段がみられる。

結語

これらの土製品が、その形状や胎土などから、土器あるいは土器製作の粘土素材ではないと考えられるが、銅鐸などの製作に関わるものであると積極的に肯定もできず、現状で

*愛知県清洲貝殻山貝塚資料館職員



第1図 1979年出土土製品A

は、非常にそれらに近いものであると推測できるだけである。今後さらに詳細な検討を加えたい。(野口哲也)

註 (1)久野雄一郎「愛知県朝日遺跡出土銅滴の調査報告」『考古学の広場』第1号1983の中の高橋信明氏のコメントによる。

(2)1988年度出土の土製品B

はじめに

愛知県埋蔵文化財センターが実施した1988年度発掘調査で、D区において金属器鑄造に関連すると思われる土製品が出土した。

出土状況

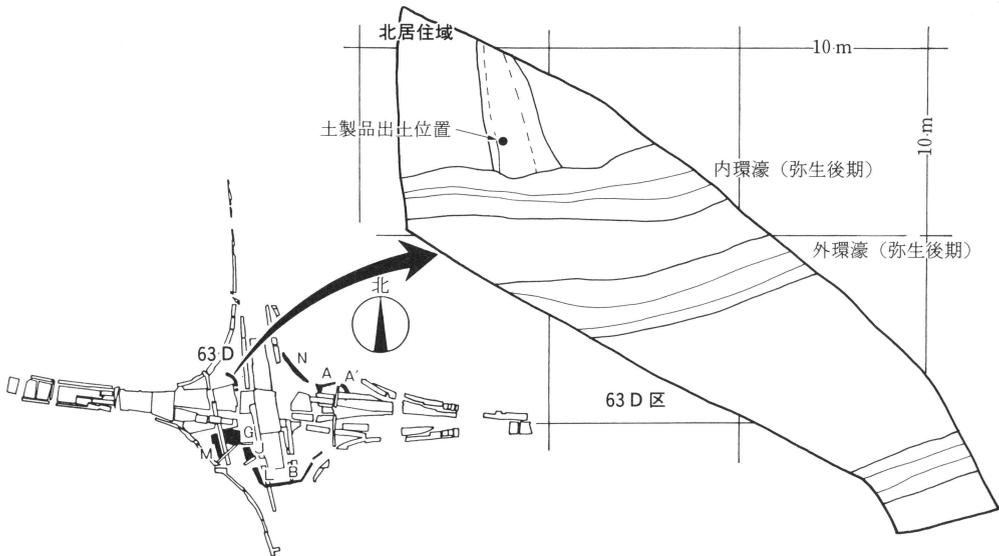
出土地点は北居住域の南縁にあたり、2条ある環濠の内側の環濠に近接した位置で、中期末の貝層を切って環濠につながる溝内に堆積した後期前半(山中期)の貝層中より出土した。

出土した段階ではこれが土製品であるとは気がつかず焼けた粘土塊程度に考えていたが、洗浄後に面を持つことがわかり、しかも問題がありそうなのでここで紹介することにした。

観察

土製品は、面を有するもの4点のほかは、小片が20点ほどある。前者の内大きいものは図示した2点で、4は、截頭円錐形を呈し、上部は平坦面をなすものの表面は剥落して胎土が観察できる。側面は灰白色を呈している。5は、側面の破片で、4と同様な円錐体である。側面上部は4と同様灰白色を呈し、下部は灰色から淡い橙色になる。

胎土は砂礫を含まず緻密であるが、赤色部分と白色部分が5~10mmの粒状に分布し、破

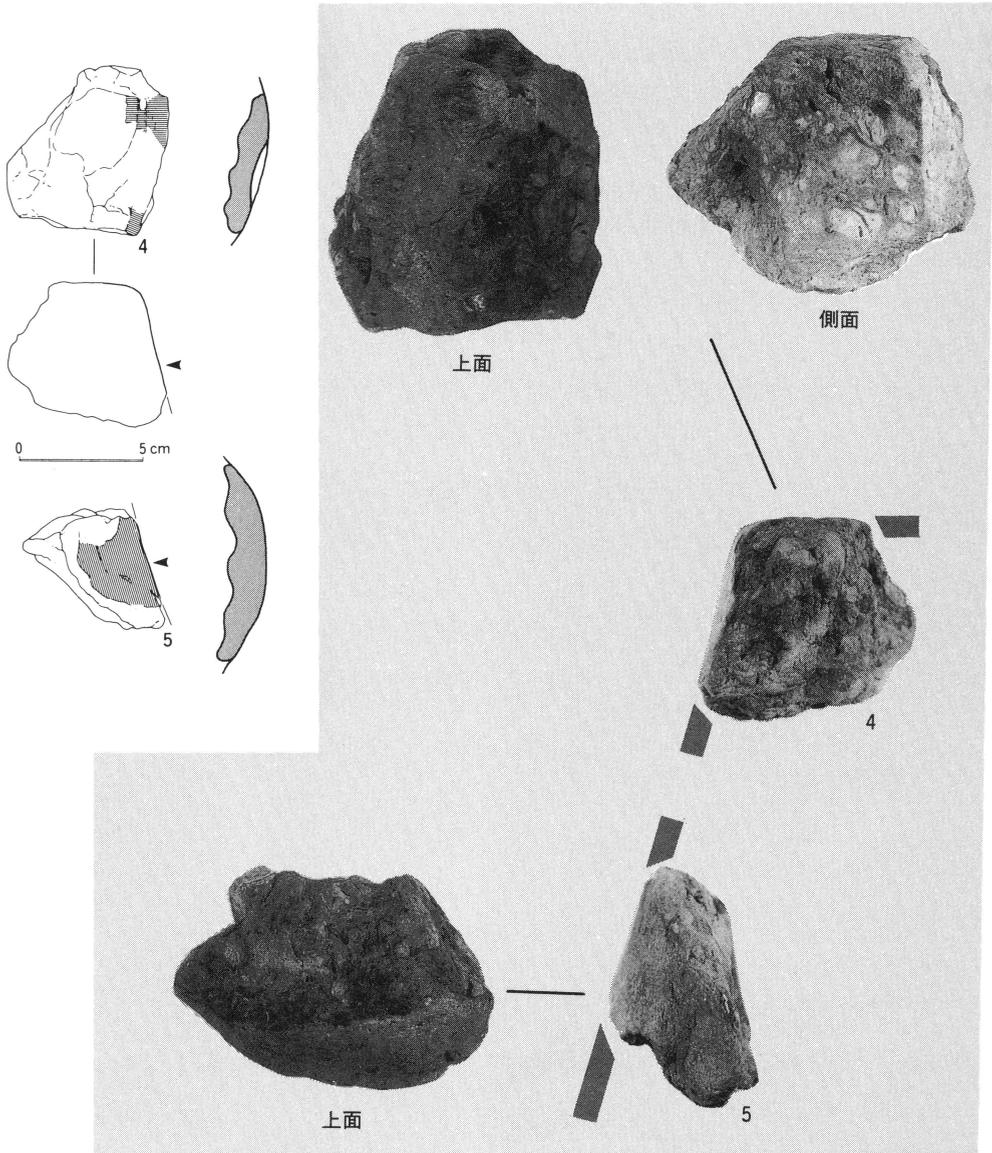


第2図 朝日遺跡63D区位置図および土製品出土位置図

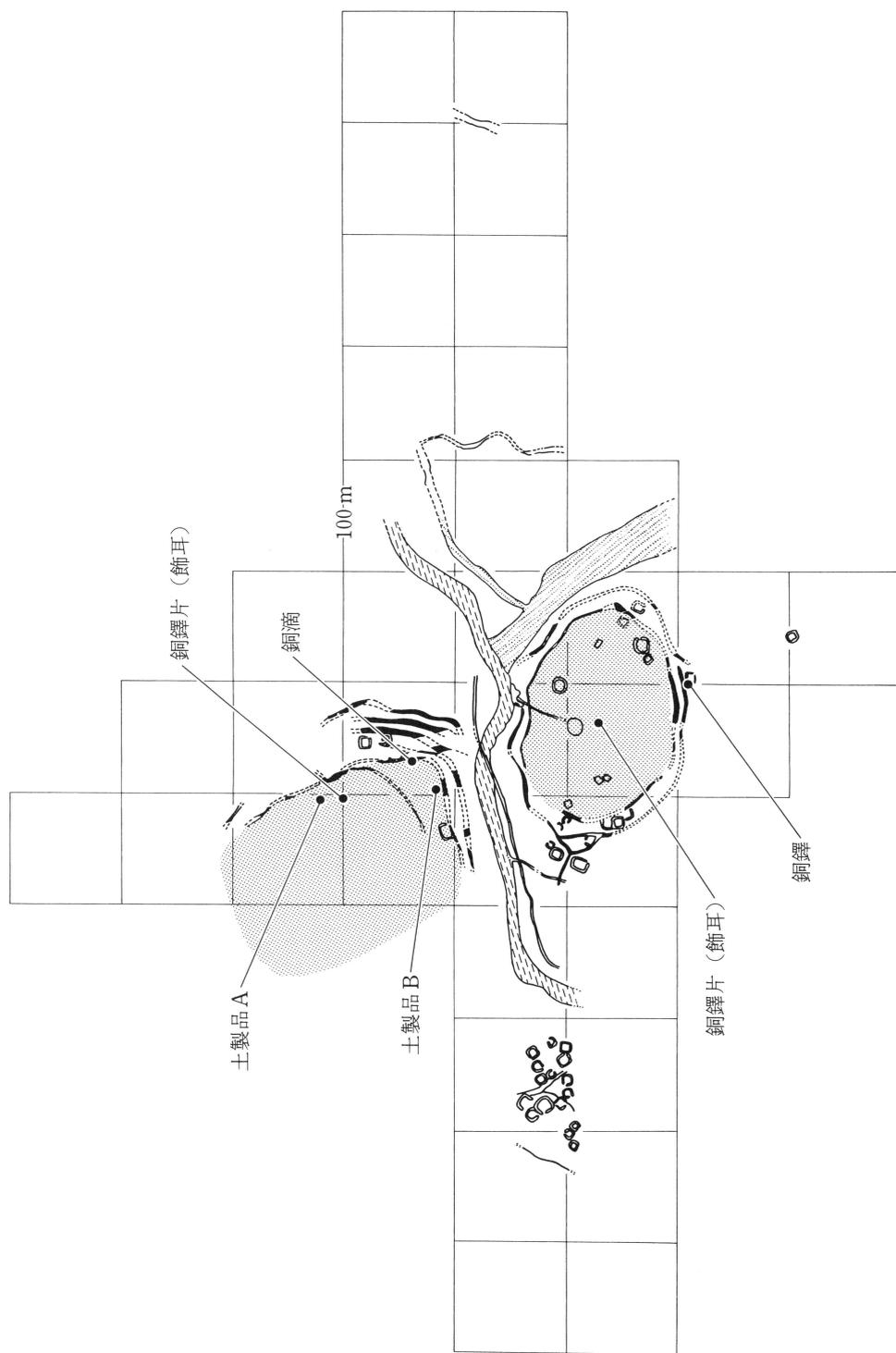
面ではあばた状をなしている。丁寧にこねられているという感じではなく、粘土が小さな粒状のまま大きな塊にまとめられたという状況を示している。

結語

ここで紹介した土製品は、确实鑄造に関連すると断定できる資料ではない。あくまで、可能性の段階にとどまるものである。しかし、朝日遺跡で青銅器鑄造が行なわれたことは銅滴の出土からうかがわれるし、先に紹介した土製品の存在、これら遺物がいずれも北居住域からの出土であること、また銅鏃の出土例も北居住域が多いことなど、状況証拠では北居住域が青銅器に関係する何かを持っていると考えざるをえないのである。(石黒立人)



第3図 1988年度出土 土製品B



第4図 朝日遺跡概略図および銅鐸等出土位置